

NEWSLETTER #104

- p.1 2015年第1回関東地区例会報告……………山添南海子
p.3 2015年第1回関西地区例会報告……………福永健一・瀧戸彩花

JASPM 第27回大会告知

- p.5 第27回 JASPM 年次大会の開催と発表募集について
p.6 会員の OUTPUT
information
p.7 事務局より

2015年第1回関東地区例会報告 山添南海子

修士論文・卒業論文報告会

2015年3月22日(日) 14:00-17:30

於:立教大学 池袋キャンパス 本館(1号館)1203教室

報告者:大森善之(東京大学教養学部)

報告者:平松絹子(東京芸術大学大学院音楽研究科)

1. 大森善之「雑音の系譜とエレクトリック・ギター —『ヴェルヴェット・アンダーグラウンド&ニコ』を中心に—」

大森氏はロック研究において、エレクトリック・ギターを焦点とした物が非常に少ないことから、音楽史におけるエレクトリック・ギターの特徴と役割を探り、エレクトリック・ギターによって発生する雑音に着目し分析した。

1950年代のアンプの物理的な事象により発生した雑音が演奏に取り込まれたことに着目し、開発当初は忌避されたノイズが奏法として取り入れられたことから、雑音とは固定的に定義されるものではないと指摘。その上でジャン・ジャック・ナティエによる雑音の定義である、創出レベル、中立レベル、感受レベル

の3つの区分において作曲家では創出レベルでは音の幅が広く、感受レベルは需要者の領域であると指摘、作曲家が新しい音を用いると聴く側が楽音と認識し音の幅広がること挙げた。歪みは楽音に取り込まれ、音楽効果となったが、一方でフィードバックは雑音としての性格を保持し、音楽の中で機能しており、エレクトリック・ギターは2つの効果を保持し、音楽史において特有の進化を遂げたという。

エレクトリック・ギターのノイズがロックに取り込まれた実例として、1967年にリリースされたヴェルヴェット・アンダーグラウンド&ニコ(以下 VU&N)による、セルフタイトル・アルバムを対象とし、収録楽曲を同時代の現代音楽と比較分析し、VU&Nを通してエレクトリック・ギターの雑音が論じられた。VU&Nを選定した理由として、歪みとフィードバックが効果的に用いられ、またメンバーであるジョン・ケイルが現代音楽のエッセンスを作品に導入、エレクトリック・ギターの雑音を使用した同時代の音楽と比較可能であるということであった。収録楽曲の“Heroin”の具体的な分析では、歌詞と雑音は対応関係であることが示された。また VU&N と現代音楽を比較し、現代音楽との類似点挙げて指摘した。その上でマイケル・ナイマンが同時代の雑音を用いた音楽を実験的作曲家、

前衛的作曲家に区分したことから、大森氏はジョン・ケージ、VU&N は構造ではなく、音響的出来事が起こる状況や行動を起こすプロセスを音によって作成する実験的音楽家であるとした。実験音楽は未決定のまま演奏する偶然性、演奏の意図が混入できない不確定性の2つがあり、その差異はどこで歪ませるか、フィードバックを入れるかといった即興演奏である。これはルールが存在するラ・モンテ・ヤングのドローン作品とルールがないVU&Nにおけるエレクトリック・ヴィオラ演奏の差異であると大森氏は指摘する。シュトックハウゼンなどは、構造を重視するが音色は考慮しなかったとVU&Nと差異を挙げた。

エレクトリック・ギターの「雑音の導入」は西洋芸術音楽にて繰り返されてきた運動の一つとした。

またVU&Nがロックバンドであることから大森氏はヴェルヴェッツが具体的にロックといえるのか、南田勝也(2001)による「ロックの3指標」を援用し検証した。VU&Nは楽曲で「アート」「アウトサイダー」の指標において卓越し、また「エンターテインメント」の指標はアンディ・ウォーホルの求める音と合致していた。雑音の導入によりVU&Nは「ロックの3指標」の卓越化に寄与し、一般的なロックと異なるVU&Nをロックたらしめていると結論づけている。

最後にVU&Nの『HEROIN』の楽曲を聴き、質疑応答ではロックを現代音楽から見るとVU&Nは同時代性を持ち、前後の時代のジャズ、ガレージ・パンクなどロック以外の文脈はVU&Nが活動したニューヨークで発展したという指摘と、VU&Nの前衛性、実験性がヴィレッジ・ヴォイス的な点で重要であり、大手流通にのらない形式も含め後にパンクの始祖的存在として参照されるアーティストになったとの意見が出された。大森氏はフロアの意見に対し、本発表に関しては構造の流れであって、史観ではなくVU&Nのアルバムの内容として行ったことが焦点であり、ひずんだ音、ノイズありきで音楽が成立している事実の研究の事実であるということであり、非常に内容が明確な発表であった。

2. 平松絹子氏「インディー・ミュージックのエスノグラフィ - グローバル化するアンダーグラウンド音楽文化とアーティスト活動の実態 -」

平松氏は創作・演奏活動を行うアーティストの立場から欧米を中心に発展してきた「インディー」として括られる独立性の高い音楽シーンがグローバル化する様子を捉え、アーティスト活動、ライフスタイルの変化を焦点とし分析した修士論文の発表を行った。

ミュージシャンは従来、一つの場所に居住しての活動が前提であったが、インターネットにおけるトランスナショナルなコミュニケーションを介して、場所に固定されずに活動することが可能となった。平松氏自身が国内外のグローバルに活動し実態を調査した。

調査は2012年に平松氏がテキサス州オースティンで開催されている音楽ショーケースSXSW(サウス・バイ・サウス・ウェスト)に出演した時点から始まっている。エスノグラフィとして、複数のインフォーマントを追って、フィールド・ワークを行った上でジャンル名、アーティストの自称、成功する前段階としてのインディー、サブ・カルチャーとしてのインディーなど異なる場で使用されるインディーという言葉に対してミュージシャン側から分析している。

平松氏がツアーを行う中で出会った4人のインフォーマントのうち2人はアジア系カナダ人であり、アイデンティティ、文化的側面、地域性による影響が濃く、日本を拠点とし女性である平松氏自身はマイノリティであることを実感したという。2人のアメリカ人インフォーマントは対極の状況で経済的なジレンマを有し、レーベルと契約し経済的安定を得るが、過密な創作活動を要求される状態にあり、一方は友人のネットワークで自由な音楽活動を行うが経済的には不安な状況と対称的であったという。調査ではカナダにて当局の規制で活動可能な会場を失いつつあり、また英語圏、仏語圏の分断で双方の活動圏が重ならず、お互いに接点がないなど現地では分からない現実と直面している。

これらを踏まえ平松氏はインディーで成功を収めるにはネットワーク資本の重要性を挙げ、ピッチフォークなどのインディー音楽メディアで取り上げられたことを契機に活動が広がることに触れた。ローカルなコミュニティがグローバルになる一方で、メインストリームが成立しない現在、「インディー」というタームが変容している。アンダーグラウンドと違い、イ

ンディーの場合はエージェントが存在し、これによって活動環境は変化していき、メディアの変化、ネットワークの進化など状況の積算によりインディーは変化しているのである。

質疑応答では、かつてのインディーは既に経済的にはメジャーでは無い点が指摘され、平松氏は2000年代以降インディーで大きな影響を与えた「ピッチフォーク」が正面的に見てインディーであると述べ、混在する状況を正するのが研究の目的であったという。また研究内容で平松氏自身の活動に関しては触れておらず、自身の活動を含めた方が良かったのではという意見が出たが、客観的な立場で研究に取り組む為に自身については除外していると答えた。だが自らの経験に照らしてインディーにおける資本はネットワーク資本であり、言語、音楽の専門知識、教養、創造力を活かす能力、他のサブ・カルチャーとの関係性の高め合いが重要とのことである。現在のインディーは柔軟な存在であり、メジャーに組み込まれず出来ることをすることでシーンが形成されているという。平松氏のミュージシャンとしての実体験を含む、非常に興味深い発表であった。

(山添南海子 日本大学大学院芸術学研究科)

2015年第1回関西地区例会報告 福永健一／瀧戸彩花

博士論文・修士論文報告会

2015年3月28日(日) 15:00-18:00

於: 京都精華大学 友愛館 Y-103教室

報告者: 高文(関西大学大学院社会学研究科)

報告者: 陳晨(関西大学大学院社会学研究科)

報告者: 栗山新也(国際日本文化研究センター共同研究員、
沖縄県立芸術大学付属研究所共同研究員)

2015年3月28日、京都精華大学において2015年度第一回関西地区例会が開催された。本報告は3名の発表のうち高氏、陳氏を福永健一が、栗山氏を瀧戸彩花が執筆している。

高文「誰が声優を歌い手に変えたのか—アニメ産業と音楽産業の提携の変化を中心に—」

まず高氏の発表について報告する。高氏の研究目的は、本来は顔の見えない「声の俳優」としてのアニメの声優が、近年アニメ主題歌を歌うことが増加していることについて、アニメ産業と音楽産業の関わり方の歴史から明らかにすることである。

高氏はまずアニメ主題歌の歴史を、①創生期(1963-1968)、②展開期(1969-1976)、③タイアップ萌芽期(1977-1989)、④タイアップ隆盛期(1990-1999)、⑤融合期(2000-)に分類する。①では声優が主題歌を歌うことは無く、②から水木一郎といった歌手が登場するが、歌番組に出演しないため「顔のない歌手」と呼ばれていた。③では飯島真理など、新人アイドルをアニメ主人公の声優として起用したり、人気男性声優で結成されたバンド、スラップスティックが登場するなどした。④では、大黒摩季や倉木麻衣といったアニメとの関連性が低い楽曲がタイアップとして起用される一方で、林原めぐみや椎名へきるといったアニメとの親和性が高い楽曲を歌う「アニソン歌手」が登場した。⑤では、一般アーティストがアニメの世界観を表す主題歌を歌ったり、さまざまなアニソン歌手が登場し、アニメのキャラクターが主題歌を歌うキャラクターソングが台頭し現在に至る。

こうした歴史において、高氏は声優がアニメ主題歌を歌うようになった原因を、アニメ主題歌制作の担い手の変容から考察する。①②の時期は主題歌の制作をアニメ産業が担っていたが、③④にかけてアニメ制作会社がレコード会社の関連企業となることが増加し、タイアップが増加する。このとき、レコード会社所属歌手のプロモーションの場として、アニメ主題歌を歌うようになる。そして⑤の時期において、エイベックスといった主題歌制作と映像制作の両方の機能を持つ企業が増加するなかで、声優がアニメ主題歌を担当し始めた、という結論であった。

フロアからは、問いに対する結論が明確でないとのコメントがあったが、「アニメ主題歌といわゆるアニソン、キャラクターソングの違いは何か」について、また、「キャラクターを受容しつつも同時に声優という存在として受容される2.5次元」についてなど、様々

に新たな問題提起がなされるディスカッションとなった。

陳 晨「現代日本における音楽のアマチュアリズム—niconico動画の『歌い手』に対するイメージをめぐって—」

続いて、陳氏の発表について報告する。陳氏の研究目的は、動画共有サイト「ニコニコ動画」にみられるアマチュアの音楽活動実践者「歌い手」について、かれら実践者たちの出現をアマチュアリズムの文脈から考察し、かつ「歌い手」やそのファンへのインタビュー調査を通して、かれらのアマチュアリズムの意識がどのように形成されているかを明らかにすることである。

陳氏はまず、現代日本の音楽領域におけるアマチュアリズムが、どのように構成され、発展してきたかについて考察をおこなう。「アマチュアリズム」とは、スポーツ領域から発源した意識で、1860年代～1890年代に成立・普及したものであるという。音楽領域においては、19世紀、劇場など公共会場で演奏する者がプロフェッショナルであり、聴衆がアマチュアであると認識されていた。この時期、プロ／アマという区分が明確であったが、アマチュアリズムは強調されなかった。20世紀以降、アマチュア音楽参加者の社会的範囲が広がり、特に日本においては20世紀後半以降、音楽を実行する玄人と、音楽を聴く素人のあいだの「灰色層」（出典：北川純子『音のうち・そと』）が肥大した。カラオケ、「おニャン子クラブ」、アマチュアバンドはその代表的な例である。こうしてアマ／プロの境界線は一層曖昧になり、この時から人々は、アマチュア音楽およびアマチュアリズムについて認識し始めたという。21世紀以降、ニコニコ動画やヴォーカロイドのような、インターネットおよび音楽演奏ツールの登場により、動画共有サイトを通じて音楽作品を世界中に発信することが可能となった。

そうした文脈において出現した「歌い手」を、そのファンたちはどのように受容しているかについて、陳氏はインタビュー調査をおこなった。その結果、歌い手が歌手として成長していく様を近い距離から「見守る」ことや、メジャーデビューといったプロ化については「自分の手を離れる」という反感を示すなど、

受け手にも一定のアマチュアリズム意識があることを指摘し、結論とした。

フロアからは、「音楽はヴィルトゥオーゾのような演奏技術の文化が根強いが、演奏技術を補助するテクノロジーの台頭という視点からアマチュアの音楽実践の歴史を考えれば、どのような歴史が記述できるか」、「歌い手とそのファンの関係のような、〈見守る〉ファン文化は、日本においては、宝塚、相撲のひいき筋など類似するものが多くみられるが、こうしたファン文化は、日本独自のものなのか、例えば陳氏の出身国である中国ではみられるか」、といったコメントがあった。

（福永健一 関西大学大学院社会学研究科）

3. 栗山新也「芸能実践の豊かさを生きる—沖縄移民の芸能から広がる人やモノのつながりの研究—」

本報告は、報告者三人目である栗山氏の博士論文の一部による。近代の沖縄の人びとが成し遂げてきた芸能実践の歴史に着眼し、他の地への移住や出稼ぎを通じた人びとのモノの交換と流通の過程を調査した結果を踏まえ、芸能が如何にして構成されたかを明示している。大阪・南洋群島・ハワイといった移民先と沖縄を往来する楽器やレコードに焦点をあて、それらモノの移動とモノを媒介とした人びとのやり取りを人類学的に検証し、芸能実践の「豊かさ」を描きだすという試みを行っている。

主に、文献調査と聞き取り調査、現物資料調査を用い、古典音楽、民俗芸能、大衆芸能の三領域を対象に調査を行っている。第一章と第二章では1899年から太平洋戦争が終了する1945年までを中心に人とモノとのネットワークを検証し、第三章と第四章では戦後も含めたモノの流通経路と過程、それに基づいた人びとの関係の構築と演奏の在り方、そして音楽の継承の方法を示している。

本報告では、はじめに芸能実践の豊かさの定義が示され、それを記述するための方法論の説明、論文における第三章と第四章から抜粋した内容の報告がなされた。第三章では沖縄とハワイとの間を行き交う三線の所有と価値付与について、第四章ではレコードにみ

られる人とモノの諸関係と稽古の形態の変容が明示された。

特に着眼すべき点は、三線が時間と空間を越えて人びとの関係を引きずっていくという点である。一丁の三線の流通の事例から、楽器を交換する際の交渉が生き生きとなされていたことが分かり、所有と交換によって生じる楽器の価値が時間と場所を越えて、また場所を移動したことにより生じていることが明らかである。楽器の所有への願望は、今日的な音楽の所有にも通じる話であり、可視化され難い「豊かさ」を示す一端として存在しているともいえる。レコードの流通においては、人びとが聴いて楽しむだけではなく、稽古の手本として所持し重宝していたことが述べられていた。全体を通して、モノを媒介として流通の過程を辿っており、芸能実践の豊かさが記述により明示的に提示されている。今後の課題では、レコードが芸能実践にどのような影響を与え、対して芸能がレコード産業にどのような影響を与えたか、人とレコードとの交流の過程に着眼した歴史的記述と研究が必要であると述べられていた。

質疑応答では、基本的な用語の確認がなされ、調査範囲の妥当性と移民であることの必要性について質問が挙がった。本報告において用いられた豊かさという表現についての議論、豊かさは量れるかといった質問をはじめとし、レコードを楽器とするか否か、芸術ではなく芸能と表現されるのは何故か、経済的理由が与えた三線の歴史と演奏者の楽器選択の自由などに及んだ。また、アクター・ネットワーク理論や空間スケールの話にまで広がり非常に活発な議論が行われた。

以上、本例会における報告である。栗山氏の研究は、人の移動による演奏の変容ではなく、楽器やレコードといったモノの移動に焦点を当てたものという点に珍しく、質疑応答にも挙がっていた一丁の三線を通して交わされるコミュニケーションの在り方とそれに伴う歌いつがれるものの変容という話は非常に興味深いものであった。栗山氏は自身も演奏や稽古を行い、それらの実践活動を踏まえた三線に対する見解が研究の基盤となっているとのことで、筆者の個人的観点ではあるが、モノの流通において生じた演奏の豊かさ

という点で、今後、研究成果に基づいた実践への応用が期待される。旋律や詩、節回しの変容はレコードの誕生により如何にしてなされたのか、より詳細な調査の報告も聴きたいと感じた。

(瀧戸彩花 立教大学大学院)

JASPM 第 27 回大会告知

第27回JASPM年次大会の開催について

【ご挨拶】 大会実行委員長・安田昌弘

2015年のJASPM大会は、12月5日(土)と6日(日)に、京都精華大学にて開催されます。自然に囲まれた左京区岩倉に立地するこの大学は、「政治の季節」真っ只中の1968年、学問の自由と大学自治の回復を目指して開設されました。教員名簿にはボブ・ディランの翻訳でも知られる片桐ユズルの名もありましたし、京大西部講堂のMOJO WESTの舞台を作った坪内成晃前学長は当時美術科の助手だったと聞いていますし、そのころの大学祭を仕切っていたのが憂歌団初代マネージャー、奥村ヒデマロだったという逸話もあります。じゃがたらのアケミが歌えなくなったのもここでした。

27回目を迎えるJASPM大会は、京都の音楽文化に少なからず関わってきたこのキャンパスの隅に昨年完成した、ポピュラーカルチャー学部の専門棟(友愛館)にて開催します。故佐久間正英の手がけた録音スタジオなど、先鋭的な音響設備も自慢です。たくさんの方のご参加をお待ちしております。

※ 今号に大会発表募集の告知の掲載を予定しておりましたが、作業が遅れたことにより発行が発表締切日が過ぎてしまったことから、見送ることといたしました。会員のみなさまにご迷惑をおかけしましたこと、謹んでお詫び申し上げます。

(広報担当理事 大山昌彦)

会員のOUTPUT

森川卓夫・著「デジタル録音に始まったハイレゾへの軌跡～学生試聴会アンケートにみるハイレゾの課題～」『音楽芸術運用研究』No.8、pp.77～pp.98、昭和音楽大学アートマネジメント研究所。

◆ information ◆

理事会・委員会活動報告

■ 理事会

2015年第1回理事会（持ち回り）

（3月18日議題送付／3月27日回答締切）

議題1 前回議事録案の承認

議題2 新入会員の承認

2015年第2回（顔合わせ）理事会

2015年6月14日 於 大阪大学

議題1 前回議事録案の承認

議題2 新入会員の承認

議題3 退会者の承認

議題4 各委員会報告

議題5 JASPM 会員データベースの事務所移転に伴う移行費用について

議題6 会員名簿刊行時期の変更について

議題7 名簿記載の研究キーワードの統一化について

議題8 理事選挙後の新理事立ち上げまでの「流れ」の確認

議題9 芸術系の他学会との連携の可能性について

■ お詫びと訂正

前号（103号）の理事会報告欄におきまして、誤りがございました。正しくは以下の通りです。

2014年第4回（顔合わせ）理事会

2014年12月5日 於 学習院大学

議題1 前回議事録案の承認

議題2 新入会員の承認

議題3 退会者の承認

議題4 会費未納による退会候補者（7条退会候補者）について

議題5 各委員会報告

議題6 総会資料の確認

議題7 総会での役割分担

議題8 会計報告の公開について

議題9 学会費納入を個人発表やワークショップの申請資格に含めることについて

ご迷惑をおかけいたしましたことを、この場を借りてお詫び申し上げます。

事務局より

1. 学会誌バックナンバー無料配布について

現在、JASPM 学会誌『ポピュラー音楽研究』Vol. 1～Vol. 11のバックナンバーは、そのすべての記事が、科学技術振興機構のオンラインサービス、J-STAGEにおきまして無料で公開されております。

(<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jaspmpms1997/-char/ja/>)

そのため、事務局に所在するVol. 11までの冊子体のバックナンバーを、希望者の方に無料で配布しております（ただし送料はご負担いただきます）。

在庫については学会ウェブサイトの「刊行物」のコーナーに随時記載しておりますので、配布を希望される方（非学会員の方でも結構です）は事務局にお問い合わせください。また、ネット上で内容が全文公開されていないVol. 12以降のバックナンバーについては、引き続き通常の販売を行い、無料配布の対象とはいたしません。ご注意ください。

2. 原稿募集

JASPM ニュースレターは、会員からの自発的な寄稿を中心に構成しています。何らかのかたちで JASPM の活動やポピュラー音楽研究にかかわるものであれば歓迎します。字数の厳密な規定はありませんが、紙面の制約から 1000 字から 3000 字程度が望ましいです。ただし、原稿料はありません。

また、自著論文・著書など、会員の皆さんのアウトプットについてもお知らせ下さい。紙面で随時告知します。こちらはポピュラー音楽研究に限定しません。いずれも編集担当の判断で適当に削ることがありますのであらかじめご承知おきください。

ニュースレターは 86 号 (2010 年 11 月発行) より学会ウェブサイト掲載の PDF で年 3 回 (2 月、5 月、11 月) の刊行、紙面で年 1 回 (8 月) の刊行となっております。住所変更等、会員の動静に関する情報は、紙面で発行される号にのみ掲載され、インターネット上で公開されることはありません。PDF で発行されたニュースレターは JASPM ウェブサイトのニュースレターのページに掲載されています。

(URL : <http://www.jaspm.jp/newsletter.html>)

2013 年より、8 月の紙媒体での発行号については、会員の動静に関する個人情報を削除したものを、他の号と同様に PDF により掲載しております。

次号 (105 号) は 2015 年 8 月発行予定です。原稿締切は 2015 年 7 月 20 日とします。また次々号 (106 号) は 2015 年 11 月発行予定です。原稿締切は 2015 年 10 月 20 日とします。

2011 年より、ニュースレター編集は事務局から広報担当理事の所轄へと移行しております。投稿原稿の送り先は JASPM 広報ニュースレター担当 (nl@jaspm.jp) ですので、お間違えなきようご注意ください。ニュースレター編集に関する連絡も上記にお願いいたします。

3. 住所・所属の変更届と退会について

住所や所属、およびメールアドレスに変更があった場合、また退会届は、できるだけ早く学会事務局 (jimu@jaspm.jp) まで郵便または E メールでお知らせください。

ご連絡がない場合、学会誌や郵便物がお手元に届か

ないなどのご迷惑をおかけするおそれがございます。

例会などのお知らせは E メールにて行なっております。メールアドレスの変更についても、速やかなご連絡を事務局までお願いいたします。

JASPM NEWSLETTER 第 104 号

(vol. 27 no.2)

2015 年 7 月 23 日発行

発行：日本ポピュラー音楽学会 (JASPM)

会長 細川周平

理事 粟谷佳司・井手口彰典・大山昌彦・

小川博司・東谷護・長尾洋子・

伏木香織・輪島裕介

学会事務局：

〒565-8532

大阪府豊中市待兼山町 1-5

大阪大学大学院文学研究科音楽学研究室

輪島裕介研究室内

jimu@jaspm.jp (事務一般)

nl@jaspm.jp (ニュースレター関係)

<http://www.jaspm.jp>

振替：

00160-3-412057 日本ポピュラー音楽学会

編集：平石貴士